會報

1955年3月　178　日本山岳會

高頭仁兵衛翁の近況

金山淳司

高頭先生は今、長岡市深澤町一丁目（新市域）の自宅で病み臥していられるので、御近況をお知らせ致します。

先生の御病氣は腦溢血、所謂チューブで、第一回の御發病は大正九年頃東京下谷の清水町の御自宅でしたが、その時は一ヶ月位の靜養で恢復された程の輕度のものでした。ところが昨年七月九日の晩に第二回目の御發病あり、以來左手、左足が殆んど利かず横臥された儘で今日に至つております。

丁度この時はヒマラヤ登山隊員の谷口、山田兩氏を長岡に迎え講演とスライドを十一日夜公民館でやることになつており、高齢の先生を遠路會場へお迎えすることが出來ないので、晝間先生のお宅へお伺いして登山隊の報告を行い、スライドも映す手筈になつていたのです。それで先生も大變お喜びで近隣の青年達に檄を飛ばし、大勢自宅に集る様計畫しておられたのでした。それなのにその前々日になつて倒れられた譯で、大變殘念がつていられた由、後で御家族よりお聞きしました。勿論隊員達も遠慮して參上致しませんでした。

それで後日、私はヒマラヤの引伸寫眞を持參して御覧願つたのですが、その時一番お氣に召した寫眞を一枚差上げて來たのですが、先日又お見舞に參りましたら、その「第一キャムプよりガネッシュ第三峰を望む」というもの凄い氷壁の寫眞が額に入つて先生が寢て右側に眺められるカモイに掲げてありました。本邸の方は玄關から客間まで、中村清太郎、茨木猪之吉その他の山の畫伯の繪がずらりと列んでいるのに別棟離れの病室にはこの寫眞の外山の繪は見當らないようでした。

扨て御發病後七ヶ月過ぎましたが、最近は言語もずつと明瞭となり、食慾も旺盛、お顔の色も大變よくなられ、直接看護の御奥様や御妹様、御孫様も一安心と言う御様子でした。主治醫は深澤町の織田醫師父子ですが、最近注射もされず、藥も出されず、只安靜していれば良いとの診療の様です。

御發病二ヶ月前の五月初に小出山の會の招待で奥様、御孫さんの詰子さんも御一緒に「駒の小屋開き」で大湯温泉に行かれ、日本山岳會の長老武田久吉さん、槇有恒さんを始め神谷さん、村井さん等の舊知と久し振り快談され、翌日は特別バスで明神尾根に行かれ、駒ヶ岳を間近に眺めて來られた思い出は殊の外懷しく、時々思い出しては話したり寫眞を見たりしていられる由で、先生も大變喜んでいられました。私もその時お伴させて頂いただけに光榮に思い小出山の會に感謝している次第です。

そこで先生の最後の山登りは一體何日だつたのでしょうか。昭和二十二年五月、日本山岳會越後支部の創立總會を苗場山頂で開いた時に參加され、本部講師冠松次郎氏と共に支部講師として講演され上ノ芝まで登られました。

次に昭和二十五年彌彦山頂へ高頭先生の壽像が建てられた時、自身參加された。併しこの時は頂上には登られず途中で休んでいられた。

先生の登山は明治二十二年先生十三歳の時彌彦山に始るから、彌彦に始まり彌彦に終ると申上げてよいかと思う。たとい先生が完全に御恢復されても、もう登山はおやりにならないと思う。

先生が御高齢にも拘らず、如何に山に執着をお持ちかは自宅より二、三十分澁海川にかゝる新橋に立つと遠く飯豊、大日岳が見えるので、最近までよくそこえ散歩された由である。併しあまりに遠いので、ほんとによく晴れた夏の朝か、秋の朝でないと見えないのだそうですが、それを期待して時々一人で眺めに行かれたそうです。「大日岳が見えますんで……」と眼前に大日岳の山塊が見える如く瞑目されたので、私は言葉を止めて、瞑想のお邪魔をせぬ様にしていました。

さて最後に、私達後輩に、何かお言葉を、とお願いしましたら「自分の實力を知らずに無理するから遭難が多いのでしょう。無理せんように……」と後輩を山の危險から護らんとする慈父の温容を示されました。新聞等は自分でお讀みにならずに讀んで貰つていられるのです。

明治三十九年有名な「日本山嶽志」の大冊を著され、引續き三十九年「山岳」創刊以來約三十年間「山岳」の編集發行人として熱情をそゝがれた先生は今も私達の精神的指導者として大きな存在であることを力強く思う次第です。

尚長岡山岳會では御快諾を得て名譽會長に二月十五日の總會で滿場一致推戴申上げました。末長く名譽會長として御健在であられ、今の御患いより一日も早く御快癒あらんことをお祈りしゝ擱筆させて頂きます（二月十九日）

富士山の地形私言

冠　松次郎

今度の富士山での遭難は誠に惨ましいことで、私は子を持つ親として殊に遭難者の御家族に對し深い哀悼の思いを寄せるものであります。

私がもし、あの人達のように若く、あのような團體で登山をしたとしたら、やはり遭難をしたに違いないとさえ思います。それだから一行の行動を咎め立てするような氣持は更にありません。ただ將來のため、後の祭りですが氣がついたことを少し述べて見たいと思います。

とにかく風雪中の富士登山は甚だ危險であることは私自身幾度か體驗をしております。今年は新雪が非常に深く、しかも當日は氣温が高かつたと云うことと時間が午近かつたことも後で聞いたのですが、それが遭難の大きな原因であつたことも首肯できます。

更に私に云わせますと、吉田口の地勢が、どうも雪崩を起し易いような氣がします。日本アルプスでもそうでありますが、冬季の季節風は西北から襲つてきます、そしてそのもたらす雪は西南面に積ることが少く却つて東北面に多量に積堆します。富士山でも、大宮口や御殿場口よりも北口の吉田口の方が遙かに多く、新雪の場合もその通りで久須志岳から大澤に亘つて雪は實に深いのです。

ところで、吉田口は知らるる通り、五合目乃至五合五勺位までは地勢が緩やかで森林が茂り、山の狀態も甚だ穩かでありますが、七合、八合附近は岩場がつづいて相當急になつています。私は曾つての春、吉田口の八合目まで登つて雪の多いのに驚いたことがあります。夏道は八合目附近からは大きく電光形に刻みつけられてある為にそう急な斜面とは氣がつかずにいたのですが、雪の深い時に來て見ると久須志岳から八合目までは全く板を立てかけたような大斜面で、隨分急角度となつていました。子供の時分に吉田口から登つて、九合目附近からの所謂胸突八丁を、石の段のような急坂を匍うようにして登つたのを覺えていますが、丁度その位の角度で頂上から八合目に向つて傾斜しているように見えました。

この大斜面の氷雪が凍りきつたその氷壁の上に大量の新雪が降りつもり、それが温度でゆるみ富士山特有の烈風に煽られたら恐らく大きなナダレの出る可能性は充分にあると思います。今度の登山には大澤を行かずに尾根を行つたことはよいと思いますが、久須志岳から八合目に至るあの大斜面の雪がナダレたらどうでしよう。それは直接大澤へ入らずに八合、七合の尾根を撫ぜて六合附近から大澤へ崩落するような地勢になつているように私には考えられます。

吉田口に比べますと大宮口の方は、吉田口の五合目附近の二三〇〇米（大宮口の三合目）までの下が惡く、それから上は却つて登りよいようです。御殿場口には兩間の中間で大體均して道は穩かです。しかしこれも冬には夏道のある窪を行かずに尾根を眞直に登るようにしています。

それから富士山は眺めても判るように、大宮口、御殿場口共に山の頭がかなり巾廣に見えますが、吉田口の方は八合目邊から頂上までは非常に引締つて見えます。三ッ峠や河口湖方面から見るとよく判りますが、それだけ頂近くが急な為だと思われます。

冬の富士登山の根據地としては今のところ吉田口より外にはありません。隨つて吉田口の五合目を根據地として今後の富士登山もなされなければならないと思います。御殿場口は富士山觀測所の人の為に七合八勺、五合五勺、二合八勺に小さな避難小屋がありますが、團體で利用することは出來ません。大宮口は勿論冬には不向だと思います。

それで私は冬季吉田口から登山する團體の方に吉田口の地貌を精しく研究して頂きたいと切望するものであります。

梅松延頼君を悼んで

成瀬　岩雄

近頃、學校山岳部の諸君の本會に對する協力は誠に積極的なものがあり、本會としても各々その傳統ある山岳部で育まれた有能なる諸君が何れは本會の次代を背つてくれる樣な人物の多からん事を期してひそかに喜んでいる次第である。

それだけに、今回の富士山に於ける遭難は多くの身内の者を亡した樣な氣がして本會としても一沫の淋しさを覺えざるを得ない。

又その節、各大學山岳部の現役先輩が率先救助作業を申出られ、協力されたと云う事は既に一應登山技術等については相當の水準に達して來た今日、眞の登山精神の眞隨に迄斯く諸君が協力一致されたと云う事を意味し、登山界として大きな進歩を示した證據と云えないであろうか。

今回の遭難者の諸君の中でも特に日大山岳部の梅松君については私が始終山岳會のルームで親しく接していただけに今以つて同君の顏が眼前にチラついている樣な氣がしてならない。いつも會のために雜務の下働きとなつて唯默々と働いてくれ、つい最近も「白き神神の座」の試寫會に來客の受付け掛りを引受けてくれたのも同君であつたし、否今回の富士山への出發寸前迄、先般丸善より本會宛に寄贈されたエベレストの寫眞の整理をしてくれていたのであつた。

マナスル登山隊員の準備にあたつても、梱包等という一番人眼につかない地味な、手數の掛つてしかも重要な仕事の一役を先輩千谷君の指揮のもとに果してくれた。

「日本山岳會では出身學校を口に出すな」という事を古い會員から、さる公開の席上で聞かされた事があるが私には今以つてその言葉の眞意が判らないのが殘念である。殊に私は最近、ウインスロップ・ヤングの名著、Mountains with a Difference を耽讀して、歴代アルパインクラブの會長の中でもその歴史の上から云つても重要なる地位を占めるヤングが盛に、やれケンブリッジ出身の誰々、オックスフォード出身の誰々だの或いは Slingsby THE Yorkshire MAN だの Norman Collie THE ULSTER SCOTT――つまり強いて日本で云えば長野縣身出の誰々とでも云う所だろうけど――だのと隨所に語つているのを見ても、その出て來る名前が何れも過去或は現在の英國に於ける著名な登山家の名前であるだけに私にとつては嬉しさの先入觀のせいかも知れないが、むしろ學校山岳部の名前が出て來ることは却て親しみを覺えてならないのである。又我國にしても小島烏水さん、高野さん、木暮さん、田部さん等と云う日本山岳會の大先輩――否日本の登山界の大先輩――の門をたゝいて登山の教えを乞うたのが、今日の學校山岳部の初期の人々である事を思えば、特に出身校を口にする事を控える氣持には如何してもなれない。殊に最近の如く學校山岳部の諸君の本會に對する愛着と協力振りを身近に見せられ、その中の親しき後輩を失つただけに尚更である。（一九五五・一・一〇）

ヒマラヤ覚書

カンチェンジュンガ

(一) 新しい高度について

去る十一月二十日、大朝その他で、エベレストの高度が、新しいインド測量局の手で改訂されたことが報道された。それによると、從來二九〇〇二呎（八八四〇米）とされていたものが、二九〇二八呎（八八四八米）となつたとのことである。がその報道の際、日本の新聞では洩れている點が多少あつたので、ここに補足を加えておきたい。

即ちこの測量は現インド測量局の測地調査部長グルティー氏（B. L. Gultee）の指導の許に行われたものであつて、最後の結果を出すまでに相談にあづかつた外國人專門家の中には、以前に舊インド測量局に關係のあつたオックスフォード大學のボムフォード（G. Bomford）代將も含まれているということであつた。

次に主題のカンチェンジュンガであるが、之の高度もエベレスト同樣に變更された。結果から先にいうと新しい高度は二八二七〇呎（八六一六米）となつたのである。

從來カンチは二八一四六呎（八五七九米）と古いインド測量局では發表しており、又バラッドとへイドンの「ヒマラヤ概略」においては二八二二六呎（八六〇三米）二八二九五呎（八六二四米）という數字も掲げられており、前者はマルセル・クルツも之をその地圖（一九三〇年版、十萬分ノ一）に採用していた。"Zum Dritten Pol" は二六一六八呎（八五八五米）を採り、最近私のところにスイスから届いた Sikkim Himalaya, herausgeben von der Schweiz. Stiftung für Alpine Forschüngen, 1 : 150,000 にも同樣の値が入れてあつた。

そこでこゝにやゝこしい問題が起つて來る。即ちK^2との關係である。K^2は今まで二八二五〇呎（八六一一米）とされて、エベレストに次ぐ世界の第二高峰となつていた。然しカンチに二八二七〇呎（八六一六米）という高度が與えられたとなると、當然第二高峰はカンチとなる譯で、之は從來からも問題になつており、知る人ぞ知るであつて、K^2とカンチのいずれが高いかは再測を待つて決定されるべき問題であるとは一部の人々の既に考えていたところである。

だがカンチだけが再測され、K^2は古い高度の儘にしておいて之を比較するということは早計であり、片手落ちであるから、世界の第二高峰がいずれかということについては、今のところ沈默している方が利口であろう。われわれはエベレストが二六呎高くなつたからといつてヒマラヤやカラコルムの山の總てに二六呎加えて比較することは出來ない。暫らく今後の成行きをみる他はないであろう。

(二) 英国隊の再挙

昨年（一九五四年）ケンプ（John Kempe）が隊長となつてカンチの南西面を探つたことについては既に御承知の筈であるが、今年も亦英國から遠征隊が派遣されることになつた。

隊長は一九五三年のエベレスト隊に副隊長の資格で參加したエバンズ（Dr. Charles Evans）である。隊員候補者には次の人々が擧げられている。

G.C. Band, Joe Brown, Dr. John Clegg, N.D. Hardie, John Jackson, T.D. Mackinnon, J.N. Mather

エバンズの希望としては彼と醫者一名を加えて八名ということになつているらしい。それから例のハントが隊長になるということもいわれていたが、まだ身體の方が充分恢復していないという理由で延期された。というのは今年の遠征隊も實をいうと踏査隊であつて、既にネパール政府からも許可をとつている五六年隊が本當のカンチ攻撃隊となる豫定になつているからである。

スポンサーはハントが委員長をやつているAC及びRGSの合同ヒマラヤ委員會。ACの委員會はこの機會に南西面の偵察を徹底的にやる決意をしており、ヤールン氷河の道をとり、上方は五四年にケンプ隊が調べたルートに從う。ケンプ等の偵察行は六四〇〇米邊りまでであつたから五五年隊への課題はそれ以上の部分の可能性の調査にある譯で、このために人も装備も十分且愼重に準備するといつている。エバンズにいわせると、五五年度の英國遠征隊としては最も大規模のものであるらしい。

そして若しこの偵察隊が充分にその目的を果したならば更に大規模な遠征隊をハントを隊長にして差向けることになつている。

參加候補者中の一人、バンドは一九五三年隊の氣象班長をやつていたが、今度も既にアリポールの観測所に對し、遠征中AIRとBBCの中繼により毎日氣象放送をやつて貰いたいと依頼した。そこの主任氣象官（S.N. Roy Chowdhury）の話によると、それは四月の終りか五月のはじめ頃から開始されるとのことである。

尚、カンチで使われる全纖維製品は候補者の一人、J・N・メイザーが試驗を行うことになつている。彼は英國綿糸工業調査協會研究所の代表者で、連絡幹部の一人となつており、且スコットランドや湖水地方で旺んに登攀を行つている山の經驗者である。二月早々に英國を出發し、七月には戻る豫定という。

ダウラーギリー山群
プタ・ヒウンチュリーの登頂

Putha Hiunchuli, 23,750 呎（7,239 米）

（28°44′50″N., 83°08′55″E.）

隊長はロバーツ少佐（J.O.M. Roberts）、同行者はロリマー少佐（G. Lorimer）とシェルパ三人。洵に小じんまりした遠征隊である。

ロバーツ少佐は一九三八年にカラコルムのマッシャーブルム（七八二一米）に試登しており、當時はグルカ銃兵隊に屬する中尉であつた。（H.J. Vol. XI）

彼等がこのダウラーギリー山群にポスト・モンスーンに入つた目的はその第二及び第三高峰への偵察と登攀にあつた。

プタ・ヒウンチュリーに登頂したのはロバーツとシェルパのアン・ニマ（Ang Nima）で、十一月十一日ことであつた。ロリマーと他のシェルパは頂下三〇〇米で寒氣に堪えきれず退却した。一行は他にも二萬呎以上の山二座に登頂している。

アン・ニマはエベレストにおいてグレゴリー、ロウと共に最高キャンプ（第九）を建設したシェルパとして有名である。HJによるとこの他にもナンガ、シンヴー、ピラミッド等の遠征隊に参加しており、喜んで仕事はするが餘りピンと來ないところがあると摘要のところに書いてある。一九〇七年生れ。

因みにダウラーギリー山群に屬する山の主なものを擧げると次の如くなる。

No.1（主峰）9/62 P峰 26,810呎（8,172米）パラッドは少し低い。
〃 2　5/62 〃 25,429（7,751）—or No.43 Peak
〃 3　6/62 〃 25,271（7,703）44
〃 4　7/62 〃 25,064（7,639）
〃 5　8/62 〃 24,885（7,585）45

地方名のあるものを西から列記すると

Dogaei　21,442呎（6,536米）
Puta Hiun chuli 23,750〃（7,289〃）
Churen Himal 24,158〃（7,363〃）—No.48 Peak
Sauwala　23,539〃（7,175）No.4の南西
（1～5 Peaks）
Mukut Himal
Tukucha　22,688〃（6,915）—No.1の北東

尚一九五四年度には英國からアンナプルナとダウラーギリー附近に三隊が出かけたことになつている。

その最後のものが十月はじめに入つたランキン大佐隊（Rankin, 50歳）で、十二月上旬カトマンヅー、デリー經由で英國へ歸つた。RGSではこの地理學遠征隊の齎した資料によつてアンナプルナ附近の精密な地圖を作成することになつている。

ピエロ・ギリオネ氏よりの便り

本誌第一七六號に私はギリオネの率いたイタリー隊のアピー征頂顛末記を書いておいたが、その後久し振りに、戰前文通していた彼ギリオネ老から懐しい便りが屆いた。（九月十六日附、着いたのは十一月十三日）

彼の手紙によると、

〝山の上の方で死んだ二人は餘りに血氣にはやり過ぎた。私はハイヤー・キャンプ（C4、六六〇〇米）の設置を主張したのであるが、一人は六月末にイタリーに戻らなければならなかつたので、C3（六一五〇米とあり）から直接登つてしまつたのである〟と。

アピー山群には、彼によると、一九五三年の五月から七月まで、一九五二年にオーストリア隊が行つたという事實はないという。

Tyson 教授を隊長とする英國隊が科學上の目的で入つているが、彼には山關係の著書として次の三冊がある。

•Le Mie Scalate nei 5 Continenti, Hoelpi, Milano, 1942 (My Climbs in the 5 Continents)

•In the Andes of South Peru, Garzanti, Milano, 1953

•Himalaya これは極く薄いものらしい。

尚彼の出生地、生年月日がわかつたので附加えておこう。

一八八三年（明治十六年）四月五日生れ。場所はイタリーの Navara（ミラノの西、モンテ・ローザの南東に當る）地區にある Borgomanero というところ。

因みにリチア奥さんの英語は大したものであるが、旦那さんのは私の英文よりももつと拙い。私は安心した。

吉沢一郎

西々北よりのチョー・オユー

一九二一年英國エベレスト偵察隊撮影

山名に關する新説について

1月31日に私のところに着いた "Bergsteiger" の12月號に、この寫眞の説明が出ているのを發見した。筆者は例の G.O. Dyhrenfurth。之は彼の "Zum Dritten Pol" にも書いてないものである。チベットの山名としてはやゝ珍らしいこのチョー・オユーという二重名は本來 Chomo Yu と書くもののようである。チョーは神或いは女神、モは女性語尾—同じ例としてチョモラーリー、チョモユンモ等がある。ユーはトルコ玉、チベットの女性が頭飾に使うのでよく知られている碧緑の準寶石（ハルプエーデルシュタイン）のことである。

「トルコ玉の女神」はエベレスト北西28粁にあるので、最初はそれ程大した山とは思われなかつた。既に一九二一年の英國エベレスト隊の一部の人々は二度もその近傍を探つているが—西方のコンブ・ラ東方のギャチュンカンの東側—餘り悉しくは調べていない。というのはその時はエベレストへの最良の道を探すのに氣をとられていて他のことには興味がなかつたからである。この寫眞によると八〇〇〇米級の山としては組みし易いように見えていたので當時からヒマラヤ登山家の間では一種の「秘密型（Geheimtyp）」の山—隠し山の意か—となつていた。（吉澤生）

図書紹介

フェルナン・ナヴァラ著

〝アララット遠征〟

本文二二二頁、寫眞二五葉

地圖二葉

一九五三年ビエール社（パリ及びボルドー）刊行

著者はボルドー在住の萬能運動選手。ド・リケー（グリンランド遠征隊員）ズビリ（カヌーによる英佛海峡横断者）その他映畫撮影者など六名による一九五二年八月登頂の記錄。郷里から牽引車に、半トンの荷を牽いた自動車を運轉してトルコ東部の山麓まで、野宿を主として強行し、フランスの若者らしい人なつこい陽氣さでトルコ軍官憲の好意を獲得し、立入禁止の國境地帯にあるアララット登山を許されて、南麓のバヤジット（二〇〇〇米）から登頂した。

同地守備隊長の好意であらゆる便宜を與えられたが同時に行動には多少束縛をうけた。一行はトルコ軍中尉の率いる一隊と共に驢馬に荷を負わせ、途中三七五〇米のところで遊牧民のテントに一休みして四〇〇〇米にテントを張り、八月十四日九時間を費して五一六五米の頂上に立つた。

一行は登頂の前後二回にわたつて山の西から東北方面を踏査し、傳説にのこるノアの方舟のあとを尋ねたが（一八七六年ジェームス・ブライスは四〇〇〇米の邊熔岩の間に木片を發見し、一八九三年ヌーリ博士は半ば萬年雪に埋れた遺跡を見たと云い、第一次及び第二次世界大戰中ロシア飛行將校は

巨舟の形を望見したと傳えている）西北の肩氷河の上に聳える巨舟の舳の形をした巨岩を見出し、その上部四二〇〇あたりで氷河に覆われた三〇〇メートルばかり舟形をしたあとをおぼろげに認めたと誌している。

この山は東につゞく小アララット（三九二五米）と共に砂漠的の荒野に孤立し、東北の一角は一八四〇年の大爆發によるすさまじい空谷が開いている。特にむずかしい山ではないが、麓は不毛の曠野、草原は三五〇〇米邊で熔岩の急崖となり、四〇〇〇米以上が氷雪を冠り、一氣に三〇〇〇米餘を登るため激しい氣温の差と天候の激變とに惱まされるという。一行は途中アンカラ東南方むかしのカパドシア地方の原始キリスト教の遺跡を訪ね、近くのアルヂェ山（三五〇〇米）に登り、歸途黒海沿岸をドライブしてアンカラに出ている。

記事は垢ぬけしないところはあるが、珍らしい邊境のようすやトルコ人の氣質習性などが窺われて興味ぶかい。（S・H）

K2—The Savage Mountain

by Charles S-Houston, Robert H. Bates & Others McGraw-Hill Book Company, New York, 1954 p. 334 $6

世界の第二高峰（或いは第三高峰）のK2は一九五四年にイタリーのデジーオ隊によつて遂に登られてしまつた。だが、一九五三年度のアメリカ隊の公式報告書への期待はそれによつても決して薄らぐものではなかつた。そして待望の〝酷しい山、K2〟は遂に私の手許に届けられた（アメリカでの發賣は十二月二十七日）。ハウストン等は一九三八年度のK2遠征について〝五哩の高み〟を出している。これはその昔確か四弗だつたと思うが、今度のはマグロー・ヒル出版社の刊行で六弗だから、日本では二、四〇〇圓、相當なお値段である。最も好きな本なら値段はいくらでも同じこと、買わない譯には行かない。ジャケット（被い紙）はロナルド・クラインのデザインで、ハントの〝エベレスト征服〟同樣アメリカ的に派手に出來ているが、中の裝釘は背も表紙のIも中々澁くてよろしい。前書はハウス、序文はハウストン（イタリー隊の成功を賞讃している）開拓史と地理關係はベイツ（この中で人夫達はK2を Kechu, Cheku, Kechu Kangri など〻呼んでいるというくだりは面白く感じた）その他を右の二人とクレイグ、ベル、ストリーザー等が執筆している。略圖とカットはC・ドウーア、各章の冒頭にある大きなカットは印象的である。中頃にある天然色寫眞九葉もいい。献呈は山中で雪崩に襲われ行衛不明になつてしまつたアーサー・ギルケイにしてある。

全體として本文は二七四頁までで後は三二四頁までが附録、この内容は日程、裝備、食糧、資金關係輸送、謝辭となつている。この部分は特に重要である。

一九三八年隊にも參加したハウスはその前書の中で〝登頂にこそ失敗はしたが、生き残ることの殆ど絶望的な行動は、高峻な山上において危險に遭遇した登山家達に、力と勇氣とを與えることであろう〟と書いている。事實、英國のエベレスト隊と異なり、アメリカ隊は山上において人夫の肩を借りずに自らの手で總ての荷物を山の高みに運び上げ、酸素も使わなかつた。以前の遠征隊でこんな高い山上（七七〇〇米）で、こんな長い猛吹雪の幾日かを堪え、生き延びたものはなく、六〇〇〇米以上の高度にこんなに長く留まつていた登山家もいないのである。

オーヴィル・プレスコットはニューヨーク・タイムズの書評欄（十二月二十七日附）において次のようにいつている。〝ハウストンもベイツも、悲劇的な感動や強烈な劇的物語りを、アンナプルナのエルゾーグのような具合に表現する文才は持つていないし、エベレストのハントのように、明瞭に正確に、順序立てゝ書く能力をも持つていないのは殘念である。又安樂椅子の冒險家達に對する本としては、前記の著書ほどには特異な點もないし、廣範圍に亘る訴求力にも缺けているものがある〟と。

われわれはそれにも拘らず、この本によつて非常な感動をうける。それはわれわれ自身山を愛し、實際に山に登り、山の辛酸を實地に嘗めているからである。アルマンがこの書の書評を書いたならば、又別の觀方をわれわれに示してくれたことであろう。ハウストン等はドラマを書くべく餘りに謙讓であり、實際家である。

C8の最高キャンプからの退却に際して發生した遭難については既に皆さん御承知のことであるから、クドクドしくは述べないが、ジャケットと中の一九五頁にもある凸版によつて各自の落下の程度やその樣相がよくわかる。シェーニング一人の果敢にして強力なジッヘルによつて總ての人を永遠の死から救い出したことは、登山史上においても、後世までも語り傳えらるべき物語りである。

又、C8における嵐の眞最中（多少やわらいだ時）八月の六日に、クレイグとシェーニングの二人が、視界三〇米以内の狀況の中をテントから一〇〇米も上方に突進したことも、彼等の敢闘精神の象徵として賞讃せらるべきであろう。（吉澤）

Seven Years in Tibet

by Heinrich Harrar
Translated from German by Richard Graves.

著者自らも「ヤングハズバンドの樣に至れり盡せりの用意を整えて飛び出したのではないから…」と云つている如く、兎に角今次の大戰に於ける英軍治下の印度のプリズナ・サャンプからアウフシュナイターと共に脱走したのが初まりでチベットに逃げ込み、二十二ヶ月もかゝつて漸く拉薩に辿り着く迄の文字通りの乞食の樣な旅行記である。

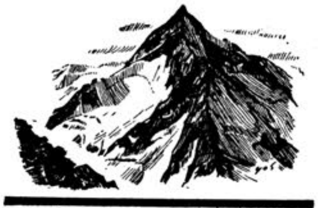
そうかと云つて聊も誇張する樣な處も無いのがこの本のいゝ所。併しその苦行振りは如何にアイガーの北壁の初登攀者であり、又一九三九年のナンガパルバートの登山隊員であつた強の者たる著者と云えども並大低ではない。インダスの上流地方からチベット側に越してから當初は晝間は草叢等にかくれて夜だけ歩きカイラス巡禮の歸途を裝うて旅を續けて行つた。嚴寒のチベット高原では盜賊に襲われた事もあり、寒氣疲勞のため遂に神經痛に惱まされながら拉薩に辿り着く手前のところなどは讀む者をしてつい先の頁をめくらせるほど、ハラハラする。

途中キロンでは九ヶ月も滞在して悠々と氣永にチベット村落の生活に親み或いは手製のスキーを驅つて樂しんでいた。又チベットの商人に僅かの所持金を貸したりしてその利息で旅費を稼がうとしたりする等完全にその土地に溶け込んでいた。もつとも、狡滑なチベット商人からは遂にその貸金は返らなかつた樣ではあるが。

キロンとは我がマナスル隊がガネッシュ峰を試みた時に眼下に見下したというので特にその名も親しく響くのであるが、このキロンにヨーロッパ人で來たのは勿論著者が最初である。著者は餘生を送るならこのキロンだと云つているほど“The Village fo Happiness”なのだ。スイスに似ているとも云つている。

拉薩に着いた時は完全にボロ着の無一文であつたが、以後五ヶ年間同地に滞在する内にはダライラマの好遇を得て、語學、スケート、テニス等の教師をして全幅の信頼を得、一九五〇年に中共が侵入して來る迄ここに留まつていた。又アウフシュナイターも灌漑工事の

=八頁4段目に続く=



会員通信

初冬の祝瓶山

笠　原　藤　七

二十九年度の登山に一應の終止符を打つべく、會員の井本敢、小泉喜重、田邊修の三君と四人で初冬の祝瓶山へ登つて來た。

十一月九日　曇　米坂線の小國驛前十一時發の國鐵バスで荒澤に至り、五味澤、徳網を經て夕刻四時二十五分針生平着。開拓小屋泊。茅葺の極めて原始的な掘立小屋が五、六棟あり、ナメコ採りが二、三人はいつていた。針生平三十町歩は既に拂下げられ近く開拓が始まるとのこと、針生平部落が出來るのも近い將來のことであろう。

十日　雨　滯在

十一日　夜半からの風雨と雷鳴で一旦は滯在と決めたが、八時頃から雨も段々小降りとなり、雲の切間に青空が見えて來たので、若し荒れた場合は大石澤の鑛山小屋で明日を待とうということで九時五分小屋を發つ。祝瓶も大玉も昨夜の荒れで薄化粧をしていた。朝日登山道からの分岐點まで四十分。

登路は頂上から西北にひいている標高記入の尾根に通じ、數年前營林署で切り拓いたものゝ由。この山は三合に區切られ、七百八十米が一合目、千二百四十米の尖峰が二合目、頂上が三合目だ。一合目から千米位までの間は一抱にも餘る姫小松の、大方は立枯れた老樹が林立していて荒涼たる景観だ。天氣はあえて惡くなるでもなく、西南の風は強いが時々小雪がちらつく程度、雨よりは始末がよい。この頃、空は大分明くなつて、左方平岩の奥に眞白い大朝日の鋭峰が見えて來た。

五味澤の人達は地圖の大玉山をカクナラ山と呼び、これと平岩山との間の千四百六十米峰を大玉山と稱えている。一合目あたりから雪が現れ、千百米位から道は時々不分明になる程度の刈り分けとなり、落葉と雪で滑り易い急坂を登り切ると露岩に出る。これが二合目で、冷たい強風をブッシュの中の僅かの窪みに避けてふるえながらお晝のパンを噛つた。

こゝからは灌木帶で目をさえぎるものもなく小一時間で頂上に達した。(一・三五—五〇)二等三角點と小石祠があり、附近にはガンコーランやコケモモが密生し、アララギも二、三株見えた。積雪約三糎。野川の谷はゆるやかにひろがり、頂上から西へひく標高記入の尾根には道がはつきり見えるが、足下は切取つた樣な斷崖となつている。その斷崖の方にも、また南の稜線の方にも踏跡があつて、どつちへ行くのか判らず、兎角踏跡があるからには何處か通れるのだろうと斷崖の方へ下りる。忽ちに道はなくなり、草付やブッシュを求めながら凡そ百米も下つて(所要時間三十分)やつと道に乘ることが出來た。惡場をさけて南の稜線の踏跡へ通じているらしい。こゝから仰ぎ見る祝瓶は小國側からはとても想像も及ばぬけわしい岩山で、全然その樣相を異にしているのに驚いた。始めのうちはまだ四角ばつて見えたが、下るに從つて山容は次第に二等邊三角形の一大岩峰にとゝのえられて來るのであつた。八百米邊から尾根の左(北)側へ下り切ると木の鳥居があり、やがて小さな掘立小屋へ出た(三・三五)。附近にあるも一つの鳥居から道は澤を右に見下しながら下ることになる。野川の渡渉は約二〇米、しびれる程冷たく最後の數米の處で遂に股までぬらして了つた。追々道はよくなり、二、三の出作り小屋を通つて渡部農場という看板の下つている、出作り小屋にしては少し高級な建物のあたりでひよいと開鑿中の林道へ出た。自動車の跡で凹凸のひどい惡道だ。こゝから二十年生位の杉の植林地帶に入り、約一時間、抜け出た處が木地山の部落であつた。時に六時五分。もう人の顔もよく判らない暗さ。五、六棟の小屋から暗いあかりがもれている淋しさうな部落だ。一番大きな家へ泊めてもらおうとはいつた家は意外にも營林署の造林小屋であつたが、林道工事をやる土建會社の人達ばかりで、色々土地の話を聞くことの出來なかつたのは遺憾であつた。

十二日　快晴　昨日が今日だつたらと多少殘念な氣がしないでもなかつた。六時の早發に小屋の娘さん達が快く朝飯を間に合せてくれたのはありがたかつた。

こゝ木地山の部落から西北望すると、祝瓶の岩峰が唯一つ野川の上流を壓して毅然と高聳している姿は偉観である。こゝからは、より高い山も見えず、また、左右に續くより低い峰も見えず、祝瓶の均勢のとれた尖峰だけが獨聳しているのだ。大日本地名辭典に「事蹟考云、祝瓶(伊波比加咩)山、一名尖嶂、劍尖天に懸る千仭、崔嵬として朝日と昆弟たり。俗間に小旭とも呼ぶ。」とあるはこの方面からの絞景と思われ、祝瓶は、我我がこの度思いがけぬ發見と喜んだこの崔嵬たる山容を以つて古く世に紹介されていたのであろう。尤、考えて見れば、祝瓶は山形の山なのだから、古來その文化圏の中心に近い面で知られて來たということは極めて自然のことであつて、我々は今まで隣の庭園の裏しか知らなかつたのが、今偶然その表を訪ねてそのすばらしさにびつくりしたというわけだ。

段々田圃があつて繪の樣に美しい桂谷(カツラヤ)の部落、完成近い野川のダムを經て平野(ヒラノ)のバス停留場へ着いれのは丁度十一時であつた。

別又澤の登行

早　川　和　宏

別又澤は、魚津驛からバスで約三十分間片貝川に沿つて登り東藏村に着く。東藏村は、両岸のせまつた片貝川の扇狀地形の附根の村で、ここから川上に沿つて一キロメートルの所に右岸からでている谷が別又谷。昔、この谷から、僧ケ岳の鑛山の開發に用いられた登山道があつたのだが、最近の谷川の氾濫と、山あれによつて、この道も廢道となつてしまつている。

十月二日、魚津(十六時三十分)—バス—東藏村(十七時)泊。

十月三日、東藏村(五時)—僧ケ岳(十二時)—宇奈月(十七時)。

東藏村を午前五時に出發して、別又谷の林道の終點は六時。これから先は何ら道形がなく水量もやや多めで、上に登るにつれて白く瀧の連續となり深谷となつた。この澤は一風變つて始めから凝解岩の岩場がつづき、胸をつく樣なぬるぬるとした黒い岩につかまり乍ら、一足一足よじ登るのも苦心したがこれも澤登りの試錬となつた。この澤を登り切るには第一から第三と三つの瀧があるのだが、九時三十分第一の瀧に到着、瀧は熔岩を流滅させた深い瀧壺である。

急な斜面をよじ登り瀧の上を巻く、第二、第三と順に續いて瀧を過ぎると植物も亜高山帶のものと變り、前方も開けた廣々とした澤で水も極めて少く順調に登ることが出來た。僧ケ岳の鞍部は十一時三十分、この邊から天氣も雨を催したが、時々の晴間に烏敢図の樣に浮び出る越中平野と。紅葉した嶺々の連續も何物にもかえがたく美しかつた。僧ケ岳の頂上は十二時で豫定通り登ることが出來た。十三時に出發、宇奈月に下山。

利根水源の記録から

古　澤　肇

「おゝおゝ麝香草が咲いて」と呟

いて上州藤原の獵師林主税は右に左に地下足袋の足を避けて歩いて行つた。白の中に紅も少し石楠花の咲き揃つた大水上山を後にして、それでも時々は深い籔の中に陥るようなことはあつても一同はすつかりのんびりと解放された氣分になつていた。時は昭和十三年七月、處は兎岳から中の岳へ向う稜線で、殿りに越後八海山の強力貝瀬保が半股引、空つ脛に素草鞋で山のような大荷物を背負つていた。昔この付近の山々を餘すところなくパイオニヤワークされた木暮さんの記録には、同行の藤島敏男さんが籔でズボンを破いてしまい猿股一つになつて平然として歩いていたのに並居る人夫達が啞然としたということが書いてあるが、それに劣らぬ野蛮さに我々を大いに頼しがらせたものだつた——。と何故こんなことを書くかというと何も彼も昔の語り草となつてしまつた當時のことどもが、最近ある雜誌を偶目してゆくりなく思い出されたからである。その雜誌は「山と溪谷」第一八四號、目次の見出しに「利根水源探險記」とあるのが目を惹いた。その内容は本年八月十七日から二十一日まで五日間に亘つて群馬縣奥利根水源調査隊（隊長以下三十名）が藤原から本流を遡つて大水上山に出て、越後三國川に降つた記録である。もとより險惡な谷のこととてその困難さは一通りでなくその努力に敬服しつゝ全文を讀了したのであるが、その記録の前文の記述が私に奇異の感を抱かせた。

以下紙面の濫費を憚らず要點を轉記すると「國内でその水源が極められていない河川はそう多くはあるまい。利根川はその一つである（中略）しかし利根川水源探險の歴史はなく明治二十七年に第一回の探險があり、第二回は大正十五年に（中略）又木暮理太郎、角田吉夫両氏の記録もあるが、これ等は總じて何れも眞の水源を遡行したとは云えず、大正十五年の記録にも未だ幾多の疑問があつた。」として今次探險の行われた由來を説明しているのである。この文をそしてその後の本文を若し同方面に何等の豫備知識を持たぬ人が讀むと恐らく利根水源の遡行は今回を以つてはじめてその成功を見たものと解するに違いない。果して事實はそうであろうか、試みに同方面の主要な記録を列挙すると、

一、明治二十七年九月、群馬縣廳利根川水源探險隊による。文献「處女地征服大利根水源行」一冊（源流に到らず水長澤に入り尾瀬に抜ける）

二、大正九年七月、利根水源の山山の一周。文献「山岳」十六年二號、利根水源の山々」(矢木澤をつめて小澤岳に登り水源の山山を一巡して大白澤山から猫又川に降る九日間の記録）

三、大正十五年八月、群馬縣廳の一行によるもの、文献「山と溪谷」一五七號、奥利根探險の思い出、安達成之」源流近くまで行きながら支流の丹後小洞に入り稜線に出て大水山上（縱走）

四、昭和四年七月、山形高枚山岳部一行による下降。文献「山岳二十四年三號」（鈴木宜三他二名、大水上山から丹後山まで縱走し、一七六〇Mの手前から源流へ降つた前後十 六日間 の記録）

五、昭和五年八月、角田吉夫氏一行（六名）による下降。文献「山岳二十六年二號、利根川水源」昭和六年八月刊行「上越國境」に收録（人夫劍持榮策を伴い、大水上山から源流に降り四泊の後寶川温泉に到着、殘雪皆無のため異常な苦闘を記録）

六、昭和七年八月、霧の旅會員大町周一郎氏による遡行。文献「山と溪谷、十五、十六、十七號に連載」（案内林主税を伴い湯の花より三泊の後大水上山を極め銀山、中ノ岐川に降る。この種の記録の中で最も詳細を極めている。

七、以上の他に源流の記録ではないが「山岳、三十五年二號」には中村謙氏の「平ケ岳を繞る澤について」という長文の記録があり、同氏の記録を含めて水長澤遡行九件、劍ケ倉澤遡行五件を併せ紹介している。また中村氏も屢々言及されている如く昭和十年頃には舊水戸高校の山岳部がこの方面をホームグラウンドにして歩いて居り、筆者も湯の花で同宿したことを記憶している。

筆者等が遡行したときはリーダー上田哲農（徹雄）の配慮から入山の時期を早めて七月の中旬を選んだので、シツケイガマワシやオイツクイの難場は雪溪上を辿つて難なく通過した代りに水長澤、越後澤の徒渉等で豫想外の苦勞をした。當時の紀行は「利根川游記」と題して雜誌「山小舍」に寄稿、後に單行本「隨筆山日記」に收められ、戰後「岳人」山の眞珠に再掲された。このほか我々の仲間では中元三郎が昭和十年八月中旬、清水の獵師小野塚正生、阿部辰五郎と共に清水から奈良澤を降つて本流に入り五泊の後大水上山に抜けている、がこれは遂に記録として發表しないでしまつた——。以上長々と並べ立てたがこれを要するに利根の記録及び文献は、古今決して少なくはあるまいということ。眞の水源も或いは遡行し或いは下降されて恐らく相當數の人に踏まれているに違いないこと。また登山者は非常に筆まめな人がある反面に、極度に筆不精乃至は沈默を守つて記録の他言を憚り、兎角仲間内だけで樂しむような傾向もあるので、記録の調査は難しいので、敢えて利根の記録に限らず公表に當つては充分愼重であられたいということ。特に編集の當事者におかれては記録發表の公的機關としての任務の重さを一層考えていたゞきたいということ、等々である。ヒマラヤオリンピックなどと云う言葉も聞かれる今日、今更こんな戰爭以前の山河の記録を引つぱり出して云々するのは記録の持つ眞實を尊びたいだけではなく只管懷舊の念に驅られて書いたのであつて文辭の齟齬、不行届のあることは許していたゞきたい。

後記　林主税は昭和十七年春、山仕事に出ていて奇禍に遭い俄かに世を去つた。我々は奥利根方面の案内者として最も信頼をおき、彼の特徴のある口髯と飄々とした人がらに親しみを寄せていた。貝瀬保も同樣率然として逝つてこの世にいない。

HOSONO
TOKYO
NYLON
TENT
SKI & MOUNTAIN
GOODS
SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

カワミヤのアルパインソール
耐久・不磨耗・滑止
あらゆる点で NO 1
合資会社 代表 平林三郎
カワミヤ靴店
東京都大田区大森 8～3740
TEL (76) 5882

山男の靴屋
体験二〇年
注文至急製作
スキー靴
登山靴
ハイキング靴
カタログ進呈

芦別岳の遭難事件 (二)

★

橋本誠二

だからといつてその隊の一人が注意義務を怠つたものとして刑法上の責任をとらなければならないと直ちに云えることになるだろうか。私は問題は別になると思う。

登山は元來危險と切り離せない行為だと私は考えている。たとえ登山をスポーツとみようが、慰安とみなそうが、それらに係わりなく危險の崩芽は山の中に存在している。多くの登山家が古い經驗を文献より學び、自ら修練し反省しているというのは、登山の本質にひそむ危險を認めているからである。いいかえれば登山は矛盾した行為なのであり、このために登山には進歩と發展があることになるこれらが外からの制約によつてあつたのでは決してない。

われわれが自らの登山についてまたあるいは互いに嚴しい反省と検討とを求める意味は、登山を發展的な見地で考えようとすることの現われであつて、それ以外の意味はないし、つけ加えるべきでもない。

さて檢察側の見解は、要するに登山者の『注意義務』にある種の線をひくことにある。この事件をも含め、ひん發する遭難の中には全く『常識的』でない事故もない譯ではない。またそれにもかかわらず同じような事件はつぎつぎに起つている。登山者全般に對する警告の意味も含め、リーダーに對する能力の規準をこの邊りでもうけるべきだ、というような感じも私はうけた。登山者の一人として檢察官のいわんとしている事柄は充分に理ることであつた。

だがリーダーをふくめ登山者の注意義務に對する能力に一定の線をひくことは一般的にできることであろうか。危險と困難との限界は、それぞれの人につき相對的であり、特定の人についてもいろいろな條件のからみあう下では一定する筈もない。これは頭の中で割出されるものではなく、山に登り危險や困難の間に自然に體得されるものだからである。

山に登るには認定された資格がいる譯はない。だれでも自由に樂しむことができること、これが登山を個性のある多彩なスポーツに發展させてきた所以である。だがこのことは見方によれば登山者の經驗、能力、登山觀には、とりまとめることのできない程の混亂があつて、しかもそれらが登山行動のなかに反映されていることにもない。

しかしながらその混沌としたなかにも常識的な選擇と秩序があつたことは認められる。北海道の場合最も困難な山岳と考えられている日高山脈では稀に出あう登山者はいずれもそれ相應の用意と經驗をもつた人達である。中央高地にしても大體同じであるが、經驗の淺い人達にあうのは、登山道や施設の整つた地域にほとんど限られている。

芦別岳ははじめに述べたように登山の對象として熟練者にも、初心者にもそれぞれ樂しむことのできる山であり、しかも登山道の外は、初心者には危險なところが非常に多いのである。

こういう事故の可能性が考えられ、しかも登山者に道をたよりに歩く初心者が多くいるのに、登山者道が荒廢して判りにくくなつており、そのことが一般の登山者に少しも知らされていないとしたら危險な地域に迷いこむおそれも充分にあることは明らかである。

このように考えてくると、事故の責は遭難の當事者だけに求められないことになるであろう。登山の施設もなにもない非常に困難な山岳に、無暴な登山をしたあげくの事故と、この問題になつている事件とは、同じに視る譯にはいかないのである。

この問題はどう解決したらよいのだろうか、判決が與えられればそれで終る問題であろうか。私にはそうとは思われないのである。

多くの地方でも同じ事情にあろうかと考えられるのだが、教官や先輩に經驗深い登山家のいる恵まれた高校山岳部でない限り、彼らには登山に關して少しも指導が行われていないだろうし、彼らも何處に指導を求めてよいが途方にくれているであろう。だがそれにもかかわらず彼らの登りたい氣持は抑えることができないし、またこれは外から抑えつけるべきことでもない。こういう事情の山岳部では山登りについては素人でありながら山岳部顧問教官の肩書をもらうのである。

教官であるが故にこのような人達に事故の責任を刑法的に求めることが、山登りの發展にどれだけプラスすることになるであろうかいのだろうか。

これ以外に考えるべきことはないのだろうか。

私には起訴ということが遭難事件の解決とは全く別の問題としか思われないのである。 (完)

=五頁よりつづく=

技師をしたり、王宮の庭園に噴水を作つたりしてダライラマの信任を得ていた。

この五年の間に拉薩に於ける諸儀式、お祭り、ラマ僧の日常生活の模様、風俗、習慣等仔細に觀察している。

著者は中共の侵入直前にダライラマ十三世と前後してチュンビーを經、インドに出て歸國したのであるが、アウフシュナイターは再びキロンに戻りここにも中共が侵入して來る寸前迄滞在した後、ネパールに移つた様である。一九五二年と一九五四年の我がマナスル隊はこのアウフシュナイターに邂逅している。 (成瀬)

☆ヒマラヤ覺書☆ (續)

ローツェへ

隊長はスイス人であるG・O及びHettie Dyhrenfurth の息子で米國々籍をもつ三九歳の Norman G. ディレンフルト教授。黒髪の彼は六呎の長身で、體重は一九〇封度 (約二三貫) ある。山には八歳の時から両親に伴われて入つており、一九五二年秋のスイスとしては二回目のエベレスト隊に参加して可なりの高所まで登つている。

資金は少ないが軒昂たる意氣を以て Idlewild のNY國際空港を出發しスイスに向つた。(二月十八日) 他の登山家(後記)とスイスで集合し、三月十日にインドに向う。

目的を要約すると①未登頂ではカンチに次ぐ世界の第二高峰たるローツェ (八五〇一米) の南面よりの登攀②登攀現場、ネパールの家庭生活、クンブ地方のラマ僧等を映畫に撮ること③エベレスト地域の寫眞測量による地圖作成④雪男の正體をつきとめること。

他の隊員の内、米國人としては George Bell か、Fred Beckey か Richard McGowan の中の一人。スイス人としては Arthur Spohel, Dr. Franz Lochmatter, そしてオーストリア人の Frwin Schneider, Ernst Senn の二名が参加し、結局六名となる模樣。

マシャーブルムへ

ボンベイ発のUP、APその他の情報を綜合すると、三月二二日現在におけるマシャーブルム (七八二一米) への遠征隊は次のようになつている。

後援はニュー・ジーランドの Canterbury Mountaineering Club 隊長は S. Conway 一行七名。Arcadia 號に乗船して豪州から三月二一日ボンベイ着、二日後カラチに向つた。隊長だけはニュー・ジーランドからカラチへ飛ぶ。

マシャーブルムには一九三八年に J.O.M. Roberts, T. Graham Brown, J. Waller, J.B. Harrison, R.A. Hodgkin 等の英國隊が遠征したが、ハリスンとホヂキンの二人が六月一七日に東峰を七六〇〇米まで登つている。

初期の「リュックサック」に關するノート

（三）

山崎安治

◇三月の上高地生活と西穂高登攀

大正十三年三月二十四日から四月六日まで、船田三郎、小笠原勇八、中島泰一郎、鈴木勇、中里直哉、藤田信道の六名により、春の計畫として上高地生活が行われた。徳本峠をこえて上高地に至り、二十六日河童橋附近の小舍へ根據を移動、二十七日岳川でスキー練習、二十九日の晴天には船田小笠原、中島、鈴木の四名中尾峠より燒岳に登山、三十日雪の中を槍澤舍へ登り、三十一日快晴に惠まれ、槍ケ岳登頂（小屋發三・五五、頂上一・四五）四月二日五千尺に下り、五日（晴）船田、小笠原の両名で西穂高に登る。ルートは雪崩の危險と登攀時間を考慮して、燒岳よりの山稜を伝うものを採用した。船田氏は三號の「西穂高岳」の中で次のように書いている。

『私が選んだものは燒岳より續く山稜へ達するもので、梓川河童橋のすぐかたわらから暗青色の針葉樹林を通り抜けて、燒岳から西穂高へと結ぶ山稜から派出された支脈に取りつくものによつた』

即ち現在の善六澤を登つたものと思われる。星空のもとに午前二時、輪かんをつけて五千尺を出發、闇の森林地帶をラテルネの光をたよりに、ひたむきに登つて六時半岳川谷が眼下に見下せる最初の峰「二四三二米」に達した。山稜に出るとすぐテイゼンに代え、このピークで二人はアンザイレン。

『ピオレとクランポンとの氷の山稜における確保法が全く三時間も續くと、ようやく西穂高の最高點が數多の聳てる峰々の涯に、その鋭き頂の尖りが望まれてきた。靜かに狹き雪庇の上を辿り、雪崩た狹き岳川へのクーロアールを今更の如く遙か低く見下し、または飛驒側の烈しく風の吹き上ぐる氷と岩との峭壁の縁を攀じて西穂高の絶巓に立つた。午前九時四十分』

更に奥穂高まで足を伸す豫定であつたが、稜線上の雪の崩壊する危險を感じて中止し、往路を引返した。五千尺歸着午後三時三十分。

大島亮吉氏以下の慶大パーティによつて、涸澤から奥穂、本谷から比穂、岳川から前穂、學習院パーティの岳川から奥穂と積雪期におけるその頂が初めて登られたのは何れもこのシーズンのことで、大正十三年という年は本邦における近代登山史上重要な一時期を畫している。

◇第一号について

内容▽春の槍ケ岳へ（船田三郎）大正十年五月、燕から縱走し槍へ登つた紀行『鹿島槍、蓮華、常念の眞白い雪の山々に區切られた安曇野の胸ともいうべき所にある北穂高村にも春は深かつた。若葉に燃える木々も日毎に黝ずんで……』と美しい書き出しである。

▽早月川入り（中島泰一郎）▽藥師岳へ（會田次郎）▽乘鞍岳スキー登山（東條義人）食糧、裝備についても意見が述べられている。▽スキー練習日記（西澤勝次）大正十年一月關温泉における第一回スキー練習の記、及びその年の十二月から大正十一年一月の第二回練習、場所は沼尻中ノ澤温泉、大正十年二月高田市における新潟縣主催全國スキー大會に優勝の記録、大正十一年二月八日赤倉山における東京スキー・クラブ主催、萬朝報後援の全國スキー選手權大會專門學校の部で優勝した記録。

年報は大正九年十月から十一年四月まで、この中に大正九年十二月二十六、七日冬富士の記録があり御殿場口から三合目まで登つたが強風のため引返している。▽寫眞は五月の槍頂上より穂高（船田）早月川よりみた劍岳（中島）雪の乘鞍岳二枚（永田）▽發行大正十一年六月二十一日▽發行所早稻田大學内山岳スキー部▽發行者中島泰一郎▽定價五十錢、廣告なし、七十一頁▽表紙はリュックサック創刊號一九二〇—一九二一、早大體育會山岳スキー部年報とあり。

◇第二号について

論説、紀行、雜録、年報とわかれ部報らしい體さいをととのえている。論説は▽五月のスキー・ゲレンデと鎗岳（船田三郎）大正十、十一年の五月二回にわたる五月の槍ケ岳スキー登山から得たデータをもとに根據地、雪崩などについて論じている。紀行は▽槍から穂高へ（小笠原勇八）▽三月の劍岳（大井正三郎）憧れの赤石へ（大村養之助）の三篇、雜録は鋸岳（小笠原勇八）鎗の北鎌尾根（船田三郎）高瀬入り硫黄澤へ（鈴木勇）北海道の山旅（中島泰一郎）野反のことども（八代陽）祖母谷の印象（兩角政人）那須岳とその附近の山々（大井正三郎）年報は大正十一年五月—十二年四月まで、十二年度委員は中島泰一郎(代表)小笠原勇八、大井正三郎、八代陽▽發行大正十二年六月二十五日▽發行所早稻田大學内山岳スキー部▽發行者中島泰一郎▽定價五十錢▽表紙 THE RUCKSACK NO. II 1922–1923 WASEDA とあり▽寫眞、別山乘越より三月の劍岳（船田）雪の立山（大井）魚無河内より赤石岳（大井）鋸岳のギャップ（船田）南岳（船田）石狩川上流大箱（中島）▽六十四頁

◇第三号について

論説、山想、飜譯、年報の四章にわかれ、夏の八ツ峰、一月の槍ケ岳、四月の西穂と何れも初登頂の記録がもられた充實した内容である。「アルピニズム」と題する船田氏の論説には、アブラハム、ギラード、ザックマンなどの外國の登山家の句を引用した後

『今や日本の山々を歩む一部の人々の間に、殊に老年と青年の間に登山術の概念について無用な煩些な議論を續けようとしている。ある者は岩登りをする人、雪の山々を歩む人を衒氣ある冒險家なりとあたかも輕蔑の意をもらし（中略）他の者はまた從來の經驗ある登山家とはただ限られた季節内のみの不自由なる古き登山術のみを知れる者にして、その新き形式を知れる自分等のみが自由に氣儘に熟れの季節、熟れの方面よりも深く山山を登り。また知ることを得るものなりと思う人々である』と當時の登山界の情勢にふれ、ついでギド・レイのアクロバティック登山術を紹介し、最終に

『山々を歩むを好む者、それは決して冒險のみを好む者ではない。自然の偉大な抱擁の裡に靜かなる幸福者たるを享受するものである』と述べている。

山想は▽一月の槍ケ岳（小笠原勇八）▽西穂高岳（船田三郎）▽三月の山小屋生活（藤田信道）▽八ツ峰(小笠原)▽秩父の印象（會田次郎）▽初夏の白馬岳(鈴木勇)▽追貝より日光白根(井上繰次郎)

飜譯は▽岩登りの發達（船田）ヤングのマウンテン・クラフトからのもので、文章が生硬でよく、理解出來ないところもあるが、新しい登山術として登場してきた岩登りについて、ガリー・エポッタ、グリップ・クライミング、スラヴ・クライミング等その變遷を簡單に紹介してある。當時岩登りに關しては數少い文献の一つ。年報は大正十二年五月から大正十三年八月まで、十三年度委員鈴木勇（代表）中里直哉、矢島幸助、藤田信道▽發行大正十三年十一月十八日▽發行所東京早稻田大學内山岳部▽發行者鈴木勇▽定價五十錢▽表紙エビ茶にマッターホンのカットあり▽寫眞麻生氏の歸朝土産ピッツ・ズポなどスイス・アルプス二枚、四月の西穂より奥穂（船田）八ツ峰より劍（藤田）雪の大槍小屋（鈴木）奥穂より槍（會田）

（おわり）

ヒマラヤ登山隊への朗報

去る二月二十一日、外務省より本會宛の通告によれば、今般ネパールヒマラヤへの遠征隊の荷物はネパールよりの入國許可證の提示あれば印度側税關に於いて荷物にシールし、無税、無檢査にて通關する事に決定したる旨、ニューデリー印度大使館より通告があつた。

これは本會としても從來の三回の苦い經驗よりして誠に朗報であり、尚手續、その他についての詳細に關する右書類は本會に保管してある。

オーストリア山岳會からの便り

オーストリア山岳會は親愛なる日本山岳會が私どもの會員であるHerbert Tichy 博士の Cho Oyu における成功に對し御送り下さつた御好意ある祝電を心から感謝いたします。

私共は又、ヒマラヤに於ける日本登山家諸兄の次第に大きくなつてゆく活動を、そしてとりわけ勇敢な日本の隊員がマナスル登攀の試みに關して報じた美しい寫眞を興味と關心をもつて見守つて參りました。

貴方がたが高き目的をお忘れにならぬならば、遭遇された常に不可避的な反撃によつても、ヒマラヤにおける將來の開拓者的活躍を斷念なさることはあるまいと確信しております。そして貴方の隊員がこの企てに間もなく成功されるよう萬福をお祈り申上げます。

心よりの御挨拶をもつて
オーストリア山岳會代表
會長 Rolf Werner
一九五四年一一月一一日

日本山岳會長殿

会務報告

二月役員総会九日（水）於ルーム
出席者 日高・松方副會長、理事成瀬・渡邊・交野・小原・沼倉金坂・初貝・外山・折井・今村
評議員・沼井・神谷・堀田・入澤・岩永監事、石原・加藤、東京支部、杉本・星野、信濃支部高山

議　事

一、東京都山岳會解散に關する件
從來都体協加盟團體として存在していた東京都山岳會を解散して新たに東京支部有志に依り別の組織を以つて東京都山岳連盟に加入する支部の案に對しては、地方支部との關連もあり更に檢討のこととする。

二、昭和卅年度理事推擧の件
定款に於ける理事の任期一年というのは毎年その三分の一が交替補充する含みをもつての一年であるが廿九年度に於いて五名の缺員があるので卅年度にはこれが補充をすることとし、次回役員總會に於いて推薦者を最終決定すること。

三、一九五五年度マナスル登山計畫に關する件　日高
ネパール外務省より「一九五五年度日本登山隊に對し登山遂行に關し援助するよう關係先へ命令した、何時頃出發するか通知あり度し」の公文書一月卅一日に接受。取りあえず當方の現狀を報告しておいた。

四、月例會計報告　沼倉
會費未納者が未だ多數あるので役員は極力會費徴集に協力され度い。

寄贈図書（敬稱略）

Osterreichische Alpenzeitung Nov-Dejem '54 オーストリア山岳會
Appalachia Feb. '55 アパラチア山岳會
De Berggids Dec. '54 オランダ山岳會
愛媛山岳史　松長晴利

マナスル登山事務費

會報前號にて説明申上げた一九五四年度マナスル登山隊基金の中事務費の使途明細は下表の通りです。

マナスル登山寄金（敬称略）

△金壱千円
長岡社会保険山岳講習会員一同

1954年度．マナスル登山隊事務費內譯

(1953. 11. — 1954. 11)—29. 11. 30—

	事務費金額	別途資金支出スベキモノ	予算170万ニテ支払ッタモノ
借室料	円 35,000.00		円 35,000.00
文具雑品費	14,184.00		14,184.00
通信費	135,440.00		135,440.00
旅費	99,917.00		99,917.00
備品費	0		0
車馬費	208,508.00		208,508.00
弁当費	126,517.00		126,517.00
集会費	38,849.00	* 52,181.00	38,849.00
社交費	678,600.00	× 391,860.00	234,559.00
人件費	20,000.00		20,000.00
雑用費	379,019.00		379,019.00
調査研究費	68,007.00		68,007.00
留守宅手当費	340,000.00		340,000.00
計	2,144,041.00	444,041.00	1,700,000.00

* ハ 1955 度分トシテ計上スベキモノ

× ヘンダーソン氏夫妻歓迎費，クリシュナー氏関係，諸費ニツキ毎日側ニ於イテ別途資金ニヨリ賄エリ

図書基金寄附（敬称略）

▽壹百圓　田邊　壽
累計　金壹萬七千六百圓

第一六三回小集会

二月二十四日（木）於ルーム
河口慧海師追憶
講師　多田等観師

西藏に入國した數すくない日本人の中で最初に行かれた河口慧海師没して本日は十周年の祥月命日にあたる。今日、慧海師の何者なるかを知らない人達が多いが、明治、大正に育つた者には忘れられない日本人の名である。明治三十年に黄檗宗の一介の僧侶として西藏に入られた慧海師の目的はもとより佛典の探究ではあつたが、その著「西藏旅行記」（明治三十七年三月博文館初版）は第一回西藏旅行の記行見聞録であり、白髪三千丈のおもむきがないでもないが、山好きの人達にとつては大ヒマラヤ山脈の紹介にはじめて接し、血わき肉おどるの思いをかきたてられたものである。

講師多田等観師はひろく西藏に關する有識の最もすぐれた一人であり、又外國人として西藏に住みダライラマ十三世の信任を得て最も長年滯在生活された唯一人で、河口師と彼地・内地に於いて親交をもたれた方である。

お話しは慧海師の人となりからはじまり、明治卅年から卅六年にわたる第一回入西、そして卅七年から大正四年にわたる第二回の印度、西藏旅行について、同じく多田氏が明治四十五年から大正十二年にいたる西藏旅行に際し彼地に於いての河口師との折々の日常の出來事等にわたり巧に御自身の入西事情から西藏潜入のスリルにとんだ旅行談を交えて話され、すこぶる面白いお話しであつた。もとより直接に登山につながるものではないが、やはりヒマラヤにつながるものであり、特に今日西藏が中共治下になつており、主都ラッサは中共軍のジープ車が駈けまわつているといはれる時に當り、おそらく慧海師並びに等觀師の體驗された西藏は面目を改新されているだろうと考えるにつけ、當夜のお話しは有意議なものであると思つた。最近好評になつているH・ハーラーの「西藏に於ける七年間」と對照的に多田師が時を得られて「西藏に於ける十餘年」を御上梓になつたらそれは面白いものだろうと思う。

當夜多田師はお話しにならなかつたが、英國隊がエヴェレストに遠征するに際して當時のダライラマ第十三世のもとに入國登山許可をあおいで來た時に、多田師は主都ラッサの僧院にて修業中で、ダライラマの信任あつて、英國隊のエヴェレスト登山許可について有利な助言をダライラマにされたということである。

尚當夜講話の後に寫されたカラースライドは、多田師が離西に際しダライラマ第十三世に懇請され、後年に送られて來た釋尊一代記の密畫で、これはラッサにあるラマ大寺院の壁畫の原畫で八百年前のものである由、時間があつてゆつくり説明をうかがえなかつたのは殘念であつた。

當集會に河口慧海師令妹參席され、會終了後ルームのアティックで、武田名譽會員も殘られ、多田師との歡談はつきがたかつた。尚河口師令妹より今回の追憶講演會に對し本會に深く感謝されたことを附記する　（交野記）

第十回国体登山と岳連問題について

第十回國體登山は本年十月卅日から十一月三日まで神奈川県丹澤山塊において開催します。その實施要綱は從來通りで基本的には全然變りはありませんが、手續上次の點だけを御注意下さるようお願いします。

大會實施要綱は近く各都道府縣の岳連及び本會支部にお届けできると思いますが、その中の參加資格の項に「日本山岳會内登山国體委員會に登錄した山岳連盟或は日本山岳會支部に所屬する者」とある點で、これは国體に出場するには主管团體に登錄されたものでなければならぬという建前から、明記したもので、本會の加盟團體でなければならぬという意味ではありません。

もう一つは豫選でありますが、從來の經驗に徴し、豫選は今回から特に愼重公正を期して頂きたく、申込書には豫選方法の概要として期日、場所等の他、選衡委員名、成績の概要を記してもらうことになりましたから、その點も十分御協力下さるようお願します。

日程は次の通りです。

第一日　午前十一時より横濱市の開會式に出場、登山準備後、四班に分れ行動に入る。
A班　横濱驛—(電車)—伊勢原—(バス)—大山町
B班　右に同じ
C班　横濱驛—(電車)—新松田—(バス)—落合
D班　東神奈川驛—(電車)—橋本(バス)—鳥屋

第二日
A班　大山町—大山々頂—ヤピツ峠—三ノ塔—塔ノ岳小屋
B班　大山町—大山々頂—諸戸—札掛—高旗山—丹澤山幕營
C班　落合—箒澤—白石澤—白石峠—大室山—犬越路—長者舍
D班　鳥屋—燒山—八丁坂—原小屋（原小屋澤源流に新設）

第三日
A班　塔ノ岳—丹澤山—蛭ケ岳—金山谷乘越—ユーシン小屋
B班　丹澤山—蛭ケ岳—檜洞丸—犬越路—長者舍
C班　長者舍—風巻—袖平—原小屋—蛭ケ岳—丹澤山幕營
D班　原小屋—蛭ケ岳—丹澤山—塔ノ岳小屋

第四日
A班　ユーシン小屋—檜洞丸—石棚—中ノ澤—玄倉—(バス)—新松田—(電車)—小田原
B班　長者舍—犬越路—大室山—白石峠—箒澤—落合—(バス)—新松田—(電車)—小田原
C班　丹澤山—塔ノ岳—ヤビツ峠—蓑毛—大秦野(電車)—小田原
D班　塔ノ岳—鍋割山—雨山峠—檜岳—秦野峠—寄村—澁澤—(電車)—小田原

第五日（十一月三日）
小田原市にて閉會式

尚**參加人員**は各競技團體、體協との協議の結果、各都道府縣ともリーダー（監督を兼ねる）一名、選手四名、計五名です。

最後に**岳連問題**について報告しておきます。

本會としては全日本的な岳連の結成については昨年夏、国體開催前に岳連の人たち（主として東京神奈川岳連）に表明した通り賛意を表するだけでなく、出來るだけの協力を約束したのであり、何等その方針に關しては變動はありません。そして今後の国體についても出來るだけ各岳連の要望を反映し国體の運營上完璧を期するため本會と今後結成されるであろう日本岳連との間で国體委員會を組織するべく、關東岳連の主腦部と協議近く發足し得る見込です。

そしてこの国體委員會が組織されれば現在本會内にある国體委員會を解散して、この新委員會に移行することに話合も出來ているわけです。次号で詳細を發表致します。　（渡辺）

会員総会予告

昭和廿九年度会員総会を左の如く開催しますから御出席下さい。
日時　四月廿三日(土)午後二時
場所　神田駿河台　日本体育協会会議室

▼総会終了後京大学士会山岳会の御好意により同会撮影のアンナプルナの十六ミリ映画を映写します。

昭和卅年四月一日發行
東京都千代田區神田駿河臺四ノ六
發行所　社團法人　日本山岳會
編集者　渡邊公平
電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番
東京都港區赤坂溜池五番地
印刷所　株会式社　技報堂